

# 種馬鈴しょの検疫

昭和54年度は98%が合格



昭和26年から開始された植物防疫法に基づく種馬鈴しょ検疫は、ウィルス病の大発生、輪腐病のまん延、またジャガイモガ、ジャガイモシストセンチュウの新発生など困難な問題をのりこえながら、本年で30年を迎える。

種馬鈴しょは、国の原々種農場で各種の検定を経て生産される原々種を、原種、採種と系統的に増殖する過程で、種いもによって伝播する9つの重要病虫害（ウィルス病、輪腐病、そうか病、粉状そうか病、黒あざ病、疫病、青枯病及びジャガイモガ、ジャガイモシストセンチュウ）を対象に、植物防疫官が検査を実施している。検査に合格すると、「検査合格証票」が交付され、これをつけたものが種いもとして流通することになる。

現在、北海道、青森、岩手、福島、群馬、山梨、長野、岡山、広島、長崎及び熊本の11道県が種馬鈴しょ検疫対象地域に指定されており、そこで生産される種馬鈴しょについては、植付前に使用予定馬鈴しょと植付予定ほ場の検査、生育中に3回のほ場検査（岡山、広島、長崎及び熊本の二期作地帯では各期2回）、収穫後には生産物検査が実施されている。

昭和54年度産種馬鈴しょの検査はすでに終了したが、全国の検査成績の概要は次のとおりである。

本年度の検査申請面積は、11道県の合計で7,455ha（原種1,070ha、採種6,385ha）であった。北海道、東北、関東、東山などの春作地域では、男シヤク、紅丸、農林1号及びメークインが主要品種

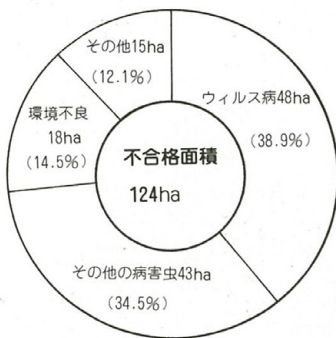
であり、中国、九州の西南暖地二期作地帯では、デジマ、ニシユタカなどが主要品種となっている。最近は、加工食品用としてトヨシロ、ユキジロの2品種が急増しつつあり、ジャガイモシストセンチュウの抵抗性品種であるツニカも本年度から原種ほに登場した。

検査の結果、合格率は98%（原種98%、採種98%）、合格種馬鈴しょ数量は178,500tで、10a当りの平均収量は2,436kgであった。

本年度の不合格の内訳は、グラフのとおりであるが、要約すると①広島、岡山でウィルス病（れん葉モザイク、葉捲病）の抜取り不十分による不合格が多かった。②北海道、群馬、岡山、広島で黒あざ病、そうか病が許容率をこえて混入し不合格となったものがあった。③福島、広島でほ場環境不良による不合格が多かったなどである。

輪腐病は、全体を通じて全く発生がなく、また、ウィルス病については、北海道を中心に後期感染防止の目的で茎葉枯凋剤の使用が定着化したため資質は格段に向上している。

馬鈴しょは栄養繁殖のため種いもに原因する病虫害の影響を受けやすく、昔から馬鈴しょ作りの第一歩は優良無病種いもの確保にあるといわれている。種いもを購入する際は必ず合格証票の添付を確かめるようお願いしたい。



検査不合格内訳



れん葉モザイク病